

病害虫発生予察情報（10月予報）

平成28年9月28日

静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	トビイロウンカ	発生量：やや少	9月上中旬発生量：少(発生なし)(-) 9月の成虫誘殺数：少 (-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並 (±)
ダイズ	べと病	発生量：並 (過去6年の平均発病株率0.2%)	9月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並(±)
	さび病	発生量：並 (過去6年の平均発病株率0.2%)	9月中旬発生量：並(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (過去6年の平均寄生株率1.4%)	9月中旬発生量：多(+) 9月トラップ捕獲数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	カメムシ類	発生量：多 (過去6年の平均寄生株率8.3%)	9月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
チャ	チャハマキ	発生量：少 (寄生虫数1.1頭/1.25m ²)	9月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	チャノコカクモンハマキ	発生量：多 (寄生虫数0.7頭/1.25m ²)	9月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率1.2%)	9月中旬発生量：少(-) 9月中旬がら発生量：少(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
ウンシュウミカン	青かび・緑かび病	発生量：並 (落果発病数0.1果/樹)	気象予報：気温：高い(±) 降水量：並(±)
	ミカンハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率1.4%)	9月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
中晩柑類	かいよう病	発生量：少 (発病度(果)0.6)	9月中下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
果樹全般	果樹カメムシ	発生量：少	9月アモトトラップ捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
イチゴ	炭疽病	発生量：やや多 (発病株率0.9%)	9月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	うどんこ病	発生量：並 (発病株率1.8%)	9月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(±)
	ハダニ類	発生量：やや多 但し、中部は多 (寄生株率10.5%)	9月中旬発生量：並(±) 但し、中部はやや多 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率1.2%)	9月中旬発生量：並(±) 9月トラップ捕獲数：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
トマト	葉かび病・ すすかび病	発生量：並 (発病株率13.2%)	9月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	黄化葉巻病 (タバココナジラミ)	発生量 黄化葉巻病：やや少 (発病株率3.5%) タバココナジラミ：並 (寄生株率6.4%)	9月中旬発生量：少(発生なし)(-) 9月中旬のタバココナジラミ発生量 ：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
	ハスモンヨトウ	発生量：並 (寄生株率1.0%)	9月中旬発生量：少(-) 9月トラップ捕獲数：やや多 (+) 気象予報：気温：高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：やや少 (寄生株率3.1%)	9月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+)
ネギ (シロネギ)	黒斑病・葉枯病	発生量：少 (発病株率5.7%)	9月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(±) 降水量：並(±)
	ネギアザミウマ	発生量：少 (寄生株率53.4%)	9月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	シロイチモジヨトウ	発生量：並 (寄生株率2.3%)	9月下旬発生量：少(-) 9月トラップ捕殺数：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ネギハモグリバエ	発生量：多 (被害株率26.6%)	9月下旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
レタス (非結球レタスを除く)	すそ枯病	発生量：多 (発病株率0.1%)	気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ハスモンヨトウ	発生量：多 (寄生株率0.1%)	9月トラップ捕獲数：やや多 (+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)

作物名	病害虫名	予報 (10月の県平均平年値)	予報の根拠
ダイコン	黒斑細菌病	発生量：多 (発病株率0.1%)	気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	コナガ	発生量：やや少 (寄生株率0.2%)	9月トラップ捕獲数：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
キク (露地)	黒斑病・褐斑病	発生量：並 (発病株率10.1%)	9月下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	アザミウマ類	発生量：やや少 (寄生株率11.4%)	9月下旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)
	ハダニ類	発生量：少 (雌成虫数2.7頭/10葉)	9月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並(±)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年（静岡県過去の10年間）との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況（調査時期と発生量）、気象庁の1ヶ月予報（気温と降水量）を記入しています。その状況が多発要因の場合は（+）、少発要因の場合は（-）を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

生育は地域によってばらつきがあったが、概ね平年並～早い状況である。

●トビイロウンカ

予報の根拠

- ・ 9月上中旬の巡回調査では寄生は確認されなかった（平年寄生株率 0.23 頭/株）。
- ・ 9月第3半旬時点の県内3ヶ所の予察灯では、本種の誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 気温が高い場合に急増することがある。葉色に注意し、水田内で坪状に葉が黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が多い場合は薬剤防除を行う。

【ダイズ】

<生育の概況等>

生育は平年並～やや早い状況である。

●べと病

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均発病株率 39.1%（平年 13.0%）と平年より多かった。なお、落葉が見られるような、激しい被害ほ場は確認されなかった。
- ・ 本病は比較的冷涼（15～20℃）で雨の多いときに発生する。1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 密植を避け、株間の風通しを良くする。
- ・ 発生が多い圃場では薬剤散布を行う。薬剤の選択にあたっては収穫前日数に注意する。

●さび病

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、本病の発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する。（病原菌の植物体への侵入適温は 24℃程度で、少雨の時に発生が多くなる）。

防除対策

- ・ 本病は初秋から晩秋にかけて発病し、いったん発生すると急速に拡大するので、発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 本病の症状は葉焼病に似るが、葉裏に灰褐色の隆起した小斑点を生じ、触れると灰褐色の粉が手につくので区別できる。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は23.2%（平年14.3%）と平年より多かった。
- ・ フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年よりやや多く推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 若齢幼虫による被害葉（白または淡褐色に透けてみえる）を確認した場合は速やかに防除を実施する。

●カメムシ類（ミナミアオカメムシ、ホソハリカメムシ、イチモンジカメムシ）

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は7.0%（平年1.1%）と平年より多かった。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。
- ・ 近年、ミナミアオカメムシの発生が増加している。

防除対策

- ・ ほ場内の発生に注意し、発生を確認した場合は速やかに薬剤防除を実施する。

【チャ】

<生育の概況等>

9月中旬の巡回調査時では、いずれの茶園も秋芽生育期であった。秋冬番の摘採はまだ始まっていなかった。

●チャハマキ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生虫数は0.24頭/1.25㎡（平年0.60頭）で平年に比べ少発生であった。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平年並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●チャノコカクモンハマキ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、平均寄生虫数は0.66頭/1.25㎡（平年0.40頭）で平年に比べ多発生であった。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平年並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 前の世代（9月上旬）に被害が見られた茶園では、摘採・整枝後早めに防除を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・ 9月中旬の巡回調査では、茶株面の平均寄生葉率は0.20%（平年2.29%）と平年に比べ少発生であった。
- ・ 天敵のカブリダニ類の発生は、平年に比べ少なかった。

- ・ 1 か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平年並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発生状況をよく観察し、発生が多い茶園では整枝後に防除を行う。

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・ 最終摘採後に生育する新芽に対する防除が重要である。感染には10時間以上の濡れが必要であるため、新芽生育初期に半日以上続く降雨があった場合には、早めに防除を行う。

●ナガチャコガネ

- ・ 一番茶で本種による被害が見られた茶園では、10月下旬から11月にかけて畝間から雨落ち部を掘り、幼虫が地表面近くに上がってきたのを確認した上で、薬剤の土壌灌注処理を行う。
- ・ 薬剤処理は、降雨後に行うと効果的である。

●チャトゲコナジラミ

- ・ 9月に成虫の発生が目立った茶園では、秋整枝終了後に行うカンザワハダニの防除時に、両種に登録のある薬剤を用いて防除する。防除は幼虫の寄生が多い裾部の葉裏に薬液が届くように散布する。また防除前に裾刈を行うと薬剤が茶株内部まで届き、防除効果が高まる。

【ウンシュウミカン】

<生育の概況等>

生育状況は平年より3日～5日早い状況である。

●青かび・緑かび病

予報の根拠

- ・ 1か月予報によると、気温は平年より高いが、降水量は平年並のため、果樹園における本病の発生は助長されない。

防除対策

- ・ 樹上発病果や発病した摘果果実は、園内の菌密度を高めるため、園外に持ち出して処分する。
- ・ 果実の傷から病原菌が侵入するため、果実に傷がつかないように丁寧に収穫する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・ 9月の巡回調査では、平均寄生葉率は1.4%(平年6.1%)と平年より少ない発生であった。
- ・ 1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 着色期に寄生すると果実の外観が損なわれることから、発生に注意し、多発している場合は防除を行う。

<その他の病害虫>

●褐色腐敗病

- ・ 本病原菌は土壌中に生息し、雨のしぶきなどで遊走子が果実に侵入する。
- ・ 10月に強い降雨があると感染・発病しやすいので、降雨前に防除を行う。過去に発生した園では特に注意

が必要である。

- ・園内の排水溝の整備、通風を良くするなど地表面の乾燥に努める。マルチ栽培や結果枝のつり上げなどで果実を地表面から離す。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・9月の巡回調査では、果実の平均発病度は0.2（平年0.6）と平年より少なかった。
- ・1か月予報によると、気温は平年より高いが、降水量は平年並のため、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・10月以降は果実では発病しないが、強風雨により葉に感染すると翌年の有力な伝染源となるため、病斑が形成された夏秋梢は直ちに切除する。
- ・すでに感染した組織内の菌にはほとんど効果がないため、降雨前の防除を徹底する。

【果樹全般（カキ・ウンシュウミカン・キウイフルーツ）】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・9月1～4半旬のフェロモントラップでの合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが25.9頭/箇所（平年51.4頭）、ツヤアオカメムシが11.7頭/箇所（平年21.8頭）と平年より少ない発生であった。
- ・9月1～4半旬の予察灯での合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが113.8頭/箇所（平年252.6頭）、ツヤアオカメムシが34.8頭/箇所（平年146.8頭）と平年より少ない発生であった。
- ・9月中下旬のスギ・ヒノキ林における調査では、10結果枝あたりの寄生数の平均は、チャバネアオカメムシは0.4頭（平年0.9頭）、ツヤアオカメムシは0頭（平年0.1頭）だった。
- ・ヒノキの毬果の吸汁痕数は9.3本/果（平年11.3本）と平年より少なかった。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では10月以降も飛来する可能性があるため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生がみられれば防除を行う。

【イチゴ】

<生育の概況等>

苗の花芽分化は平年並～やや遅い。

●炭疽病

予報の根拠

- ・8月の育苗ほの巡回では発病は見られなかった（平年値なし）。また、病害虫防除員からの報告によると各主要産地における発生量はやや少ない～多いまで地域によりばらつきがあった。

- ・ 1 か月予報では気温は平年より高いため本病の発生を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は見つけしだい周辺部も含めて抜き取りビニール袋に入れ処分する。
- ・ 今後、開花～着果期頃、株に負担がかかると発病が増える可能性がある。
- ・ 今後の温室内の温度管理に注意し、高温にならないようにする。特に、ハウスのビニール被覆後の管理に注意する。

●うどんこ病

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回では平均発病株率は1.8%であった（平年値なし）。病害虫防除員からの報告によると各主要産地における発生は平年並である。
- ・ 本病は20℃前後の気温で発生しやすい。1か月予報では気温は平年より高いため本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 予防散布を中心に定植初期に防除を行う。特に、育苗期に発生がみられたほ場では防除を徹底する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 8月の育苗ほの巡回や防除員等からの情報では、発生は平年並であった。ただし、中部地域の発生は県平年寄生株率よりやや多く、防除員からの情報でもやや多であった。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 近年、本ほの発生が多い。天敵を利用する場合は、天敵導入時のハダニ密度が重要である。このため、防除を徹底するなど天敵導入時にはハダニの密度が高くないようする。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・ フェロモントラップの調査によると、9月の誘殺数はやや多で推移している。例年10月が発生のピークとなる。
- ・ 9月の防除員等からの情報では、平年並の発生である。
- ・ 1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並で、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。初期発生に注意し、若齢のうちに防除を行う。

【トマト】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●葉かび・すすかび病

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区での巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率8.1%）。
- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する（菌の生育適温は葉かび病20～25℃、すすかび病26～28℃で、どちらも多湿条件で発病が多くなる）。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が2週間程度と長く、多発してからでは薬剤の効果が劣るため、発病が認められたら直ちに薬剤を散布する。ただし、耐性菌の発生を防ぐため、散布薬剤はローテーションする。
- ・多湿にならないように換気につとめ、過度の灌水を避ける。
- ・被害葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。特に多発生ほ場では摘み取り作業を徹底する。
- ・葉かび病とすすかび病は肉眼では見分けがつかないが、本県では、秋期はすすかび病の発生が多い傾向がある。

●黄化葉巻病（タバココナジラミ）

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区での巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病株率1.4%）
- ・媒介虫のタバココナジラミの平均寄生株率は0.8%（平年5.5%）と平年より少なかった。ただし、病害虫防除員からは、発生がやや多いとの回答があったため、注意を要する。
- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高いため、タバココナジラミの増殖を助長する。ただし、病害虫防除員からは、発生がやや多い～多いとの回答があったため、注意を要する。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、ハウス外の土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。
- ・脇芽や摘果などの残さは放置すると野良生えとなり、媒介虫や本病の伝染源となるので、ほ場付近には放置しない。
- ・タバココナジラミに対して以下の防除を徹底する。

施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。

新芽への成虫の寄生や黄色粘着板の捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区の巡回調査では、平均寄生株率は0.3%（平年0.8%）と平年より少なかった。
- ・フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年よりやや多く推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が劣るので、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

●ハモグリバエ類

予報の根拠

- ・9月中旬の中遠地区の巡回調査では、ハモグリバエ類の平均寄生株率は0.5%（平成1.9%）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、10月の気温は平成より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・施設開口部に防虫ネットを設置し、侵入を抑制する。
- ・葉の被害や産卵痕、黄色粘着板による成虫捕獲数に注意し、発生が増加する場合は薬剤防除を実施する。

【ネギ（シロネギ）】

<生育の概況等>

9月の降雨により、乾燥の影響を受けていたネギの生育が持ち直した。

●黒斑病・葉枯病

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、本病の平均発病株率は0.2%（平成2.9%）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成並であることから、本病の発生を特には助長しない（黒斑病菌の分生子の発芽・形成適温24～27℃、葉枯病多発気温15～20℃）。

防除対策

- ・本病は多湿条件で多発するため、植え溝の両端に排水用の溝を切るなどして、ほ場排水を良くする。また、肥料の過不足により発生しやすいため肥培管理を適切に行う。
- ・薬剤防除は予防散布や初期発生時の薬剤散布の効果が高い。このため、各薬剤の使用回数に注意し防除する。

●ネギアザミウマ

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は4.4%（平成41.8%）と平成より少なかった。
- ・1か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平成並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、9～10月は本種の発生程度が高まる。多発するとネギの生育が遅れるため、発生初期に防除する。発生が多いほ場では早めに防除を行う。

●シロイチモジヨトウ

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は0.4%（平成4.3%）と平成より少なかった。
- ・場内のフェロモントラップによる誘殺数は、9月上旬に平成を上回り、予察灯の誘殺数も9月中旬以降平成を上回っている。
- ・1か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平成並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ほ場内を観察し、葉に卵塊（数粒～数十粒の卵の塊で灰白色の毛に覆われている）を見つけた場合は、早急に除去する。
- ・多発ほ場では、定期的に薬剤防除を実施する。

●ネギハモグリバエ

予報の根拠

- ・9月下旬の巡回調査では、平均寄生株率は63.6%（平年37.2%）と多発生であった。
- ・1か月予報では、10月の気温は高く、降水量は平年並と予想され、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・本種が多発すると生育が遅れるため、発生が見られるほ場では早期に防除する。

【レタス(非結球レタスを除く)】

●すそ枯病

予報の根拠

- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は22～25℃で、多雨で発生が増加する）。

防除対策

- ・本病は土壌伝染性のため、前年発生がみられたほ場では土壌消毒を実施する。
- ・被害株には多数の菌核ができ、次作の伝染源となる。本ほでは発病株は抜き取り、ほ場外の土中深く（地下50cm以上）に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査では、9月の成虫誘殺数は平年よりやや多く推移している。例年、10月が発生のピークとなる。
- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・本種は中齢以降では薬剤の効果が悪いため、ほ場内での発生に注意し、若齢幼虫の防除に努める。

<その他の病害虫>

●ビッグベイン病

- ・本病は土壌伝染性のため、常発地では土壌消毒を行う。
- ・本病の発生が確認された地域からは土壌の移動をしない。
- ・発病ほ場で使用した農機具は十分水洗いし、消毒する。

●斑点細菌病

- ・本病は降雨により発病が助長されるため、降雨後はなるべく早く薬剤を散布して予防に努める。
- ・発病葉は摘み取って、土中深くに埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●べと病

- ・初発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。特に、育苗期に本病と疑われる症状があった場合や、周辺でべと病が多発している場合など、感染源が多いと思われる場合は注意する。
- ・育苗期の防除を徹底し、発病株を本ばに定植しないよう苗を厳選する。

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・感染時期が早いほど被害が大きいため、ウイルスを伝搬するアブラムシ類の薬剤防除は、特に育苗期や定植後の生育前半に徹底して行う。
- ・発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●ナモグリバエ

- ・常発地域では、育苗期後半または定植時に薬剤を処理する。
- ・定植後は初期発生に注意し、発生を確認した場合は薬剤防除を行う。

【ダイコン】

●黒斑細菌病

予報の根拠

- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する（病原菌の生育適温は25～27℃で、多雨で発生が増加する）。

防除対策

- ・生育の衰えは本病の発生を助長するため、排水に注意し、適切な管理に努める。
- ・病原細菌は、暴風雨等による傷口から侵入するので、暴風雨前または直後に防除を行う。
- ・特に、葉柄基部から侵入した場合は根部に影響を与え、商品価値を落とすこともあるため注意する。

●コナガ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると、9月の成虫誘殺数は平年より少なく推移している。
- ・1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ほ場内の発生に注意し、初期防除に努める。

<その他の病害虫>

●モザイク病（アブラムシ類）

- ・モザイク病の発生がみられた場合は、早めに発病株を抜き取り土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分するとともに、アブラムシ類の防除を行う。

【キク（露地）】

<生育の概況等>

生育は平年よりやや遅い状況である。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 9月下旬の巡回調査では、平均発病株率 7.1% (平年 8.5%) と、平年並であった。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は平年並のため、本病の発生をやや助長する(病原菌の生育適温は黒斑病 24~28℃、褐斑病 20~28℃で、多雨で発生が増加する)。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、例年発生が見られるほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速かに摘み取り、土中に埋めるか、ビニール袋に入れて腐らせる等して適切に処分する。

●アザミウマ類 (ミナミキイロアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

予報の根拠

- ・ 9月下旬の巡回調査では、平均被害株率は 2.6% (平年 8.8%) と平年より少なかった。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 新葉の被害のほかに、下葉の葉裏の被害にも注意し、被害が認められる場合は薬剤散布を実施する。
- ・ 膜割れ時から蕾内に侵入し花弁を食害するため、開花初期から被害に注意する。
- ・ ミカンキイロアザミウマ等が媒介する「えそ病」が発生した場合は速やかに発病株を抜取り、土中に埋める等適切に処分する。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 9月下旬の巡回調査では、ハダニ類の発生はみられなかった(10葉当り平均寄生雌成虫数平年 1.0頭)。
- ・ 1か月予報では、10月の気温は平年より高く、降水量は並であるため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 中~下位の葉表のカスリ症状に注意し、葉裏にハダニ類の生息が確認された場合は薬剤防除を行う。

3 季節予報

(1) 1か月予報 (東海地方 平成 28 年 9 月 22 日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 9月24日から10月23日】

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。天気は数日の周期で変わるとでしょう。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3~4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	1 0	2 0	7 0
1 か月	降水量	3 0	4 0	3 0
1 か月	日照時間	3 0	4 0	3 0
1 週目	気温	1 0	1 0	8 0
2 週目	気温	1 0	2 0	7 0
3～4 週目	気温	2 0	4 0	4 0

【予報の対象期間】

- 1 か月 : 9月24日(土)～9月23日(日)
- 1 週目 : 9月24日(土)～9月30日(金)
- 2 週目 : 10月1日(土)～10月7日(金)
- 3～4 週目 : 10月8日(土)～10月21日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成28年9月23日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 10月から12月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

- 10月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。
- 11月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- 12月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。岐阜県山間部では、平年と同様に曇りや雪または雨の日が多いでしょう。

【気 温】

3か月			10月			11月			12月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	40	40	20	30	50	30	30	40	30	40	30

【降水量】

3か月			10月			11月			12月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	40	30	30	40	30	40	30	30	30	40	30

※ 参考資料

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	10月	11月	12月	10月	11月	12月
浜松	18.8	13.5	8.4	165	119	52
静岡	18.9	13.9	9.0	200	132	63
三島	18.0	12.8	7.9	184	107	55

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※参考資料

1. 利用上の注意

- 気温・降水量は「低い (少ない)」「平年並」「高い (多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分 (それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- 晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い (少ない) 場合は「平年に比べて多い (少ない)」、また平年の日数と同程度に多い (少ない) 場合には「平年と同様に多い (少ない)」と表現します。なお、単に多い (少ない) と表現した場合には対象期間の2分の1より多い (少ない) ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--

平成 28 年度 技術情報第 6 号
ネギ ネギハモグリバエ

平成 28 年 9 月 28 日
静岡県病害虫防除所長

県西部地域のネギ生産ほ場で、引き続きネギハモグリバエが多発しています。被害の拡大が予想されるため、防除の徹底をお願いします。

1 発生状況

- (1) 県西部（浜松市・磐田市）地域のシロネギ生産地における 9 月下旬の巡回調査では、本種の平均被害株率は 63.6%、葉の被害度は 29.3 で平年値（37.2%、13.7）と比べて多発している（表 1）。
- (2) 県内産地の防除員から多発の報告がある。
- (3) 9 月 22 日発表の 1 か月予報では、向こう 1 か月の平均気温が高い確率が 70%、降水量、日照時間は平年並の確率が 40%で、本種の増殖に好適な気象条件である。

2 防除方法

- (1) 例年に比べ多発しているため、ほ場の状況をよく確認し、幼虫による食害痕を確認したら防除を実施する。防除薬剤については表 2 を参考にするとともに使用時には必ずラベルを確認し使用基準を遵守する。
- (2) 液剤散布では展着剤を加用し、薬液が根元から葉先まで十分に付着するように、丁寧に散布する。
- (3) 薬剤等の詳細については静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準 (<http://www.s-boujo.jp>) を確認する。また、不明な点は病害虫防除所、農林事務所、農協等指導機関に問い合わせる。



図 1 ネギハモグリバエ（成虫）



図 2 幼虫による食害痕

表 1 9 月のネギハモグリバエの発生状況

害虫名		寄生株率(%)	葉の被害度
ネギハモグリバエ	本年平均値	63.6	29.3
	平年値	37.2	13.7

調査年月日:平成 28 年 9 月 21 日

県西部(浜松市・磐田市内)10 か所調査 平年値は過去 10 年間の平均値

表2 ネギにおけるネギハモグリバエ・ハモグリバエ類の主な防除薬剤*

商品名	使用方法	希釈倍数 ・使用量	時期	回数	IRAC** 作用機構分類	系統名
ディアナSC	散布	2500~5000倍	収穫前日まで	2回以内	5	スピノシン系殺虫剤
ダントツ水溶剤	散布	2000~4000倍	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ダントツ粒剤	株元散布	3~6kg/10a	収穫3日前まで	4回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
アルバリン粒剤	株元散布	6~9kg/10a	生育期(但し、収穫3日前まで)	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
スタークル粒剤	株元散布	6~9kg/10a	生育期(但し、収穫3日前まで)	2回以内	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
リーフガード顆粒水和剤	散布	1500倍	収穫7日前まで	2回以内	14	ネライストキシン系殺虫剤
カスケード乳剤	散布	4000倍	収穫14日前まで	3回以内	15	昆虫成長制御剤
アルバリン顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
スタークル顆粒水溶剤	株元灌注	400倍	生育期(但し、収穫14日前まで)	1回	4A	ネオニコチノイド系殺虫剤
ダイアジノン乳剤40	散布	1000~2000倍	収穫21日前まで	2回以内	1B	有機リン系殺虫剤

* 静岡県農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準より抜粋

** 世界農薬工業連盟 殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)による分類。農薬抵抗性の発達を回避するため、同一コードの薬剤は連用を避ける。

問い合わせ先：静岡県病害虫防除所（TEL：0538-36-1543）

病害虫防除所 HP（URL）：

<http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html>

病害虫防除基準 HP（URL）：<http://www.s-boujo.jp/>